３・１１の衝撃

あれから７年になる。2011 年 3 月 11 日のことは忘れることができない。忘れてはならない。写真は順に、当日の朝日新聞号外、『復興支援地図』を 2 冊買い求め、1 冊はゼミ室において学生に活用してもらうことにした。震災・原発関連の図書や雑誌、写真集を読み講義や講演などで紹介した。当時はレポートを「中断」していたが、『ジャーナリスト』2011 年 4 月号に寄稿した（拙著『災後の新聞』所収）ので紹介したい。

東日本大震災は 4 月 11 日、発生から 1 か月を迎えた。いまだ被害の全貌すら明らかになっていない。がれきの中を必死に肉親らを捜し続ける人たち、放射能汚染により捜すこともできず、「帰れない町」に途方に暮れる人たち。涙なしに記事を読み進められない。3・11 大震災の報道を通じて、あらためて新聞の役割を痛感した。河北新報は震災で社内での製作ができなくなり、新潟日報で紙面を作って何とか翌朝の新聞を発行できた。阪神大震災のときの神戸新聞を想起させる。地元夕刊紙・石巻日日新聞は、震災翌日から壁新聞を作って避難所などに張り出した。情報が決定的に不足する被災者にとって、手書きの新聞がいかに貴重な情報源であったことか。

河北新報は震災翌日、「現代日本社会は初めて巨大複合型災害に直面した」と報じた。16 年前の阪神大震災と比べても、被災範囲は東北から関東に広がり、都市型と中山間地型の災害が並立している。大地震と大津波、それに「人災」といえる原発事故が重なる。世界有数の地震列島で起きたトリプル大災害、「原発災害」であるが、「想定外」ではすまされない。いまも強い余震が続く中、広域にわたる被災地の復興は困難をきわめている。一歩、また一歩、再建につながる長い道のりをともに手を携えて踏み出していこう（河北新報 4 月 11 日）。

「フクシマ」は世界を揺るがしている。日本の原発には「安全神話」という幻想があった。復旧の見込みすら立たない深刻な事態は、原子力という統御できないエネルギーの恐ろしさを見せつけている。東京電力と政府の混乱・無策ぶりはもちろん、メディアの原発報道も疑問だらけだ。放射能汚染を「ただちに影響ない」とする楽観的論調、原発推進を前提とした報道が目立つ。福島第 1 原発事故はチェルノブイリに匹敵する最悪の「レベル 7」に 2 段階引き上げられたが、これでも原発推進の旗を振り続けるのか。特報「危険性 40 年訴え小出裕章・京大助教に聞く」（東京 4 月 9 日・中日 4 月 13 日）は、事故の現状や原発推進の背景を知るうえで示唆に富む。産官学の「原子力村」に対して、独自の取材・調査による鋭い報道と検証を期待したい。あらためてメディアの責任・あり方が問われている。

（2018 年 3 月 11 日）